第四講 「差異」と「類似」の発展的読解

次の文章は、大正九年（一九二〇年）に発表された寺田寅彦の随筆「自画像」の一部である（省略した箇所や表記をあらためた箇所がある）。これを読んで、後の問いに答えよ。

手近な静物や庭の風景とやっているうちに、描く物の種がだんだんに少なくなって来た。本当は同じ静物でも風景でも排列や光線や見方をちがえればいくらでも材料にならぬ事はないが、素人（しろうと）の初学者の自分としては、少なくも一わたりは色々ちがった物が描いてみたかった。一番描いてみたいのは野外の風景であるが、今の病体ではそれは断念する外はなかった。それでとうとう自画像でも始めねばならないようになって来た。一体自分はどういうものか、従来肖像画というものには［A］興味を感じないし、殊に人の自画像などには一種の原因不明な反感のようなものさえもっているのであるが、それにもかかわらず遂に自分の顔でも描いてみる気になってしまった。

それである日鏡の前に座って、自分の顔をつくづく見てみると、顔色が悪くて頬がたるんで眼から眉の辺や口許（くちもと）には甲メイジョウの出来ない暗い

不愉快な表情が泛(ただよ)うているので、描いてみる勇気が一時になくなってしまった。そのうちにまた天気のいい気分の好い折に小さな鏡を机の前に立てて見たら、その時は鏡の中の顔が晴れ晴れとしていて眼もどことなく活気を帯びて、前とは別人のような感じがした。それでさっそく一番小さなボール板へ写生を始めた。鉛筆でザッと下図をかいてみたがなかなか似そうもなかった、しかし構わず絵具を付けているうちに間もなく［B］人の顔らしいものが出来た。のみならず［C］いくらかは自分に似ているような気もした。顔の長さが二寸くらいで塗りつぶすべき面積が狭いだけに思ったよりは乙雑作なく顔らしいものが出来た、と思ってちょっと愉快であった。それでさっそく家族に見せて回ると、似ているという者もあり、似ていないというものもあった。無論これはどちらも正しいに相違なかった。

　このはじめての自画像を描く時に気のついたのは、鏡の中にある顔が自分の顔とは左右を取りちがえた別物であるという事である。これは物理学上からは極めて明白な事であるが、写生をしているうちにはじめてその事実が本当に体験されるような気がした。衣服の左り前なくらいはいいとしても、また髪の毛の撫(な)で付け方や黒子(ほくろ)の位置が逆になっているくらいはどうでもなるとしても、もっと微細な、しかし重要な眼の非対称や鼻の曲り

やそれを一々左右顛倒（てんとう）して考えるという事は非常に困難な事である。[1]要するに一面の鏡だけでは永久に自分の顔は見られないという事に気が付いたのである。二枚の鏡を使って少し斜めに向いた顔を見る事は出来るだろうがそれを実行するのは[丙]おっくうであったし、また自分の技量で左右の相違を描き分ける事も出来そうになかった。そんな事を考えなくてもただ鏡に映った顔を描けばいいと思ってやっているうちに着物の[注①]左衽（ひだりおくみ）の処でまたちょっと迷わされた。自分の科学と芸術とは見たままに描けと命ずる一方で、何だか絵として見た時に不自然ではないかという気もするし、年取った母が嫌がるだろうと思ったので、とうとう右衽に胡魔化（ごまか）してしまったが、[2]それでもやっぱり不愉快であった。

この自画像No.1は恐ろしく皺（しわ）だらけのしかみ面（づら）で上眼に正面を睨（にら）み付けていて、如何（いか）にも性急な癇癪持（かんしゃくもち）の人間らしく見えるが、考えてみると自分にもそういう資質がないとは云われない。

それから二、三日たってまた第二号の自画像を前のと同大の板へ描いてみた。今度は少し顔を斜めにしてやってみると、前とは反対に大変温和な、のっぺりした、若々しい顔が出来てしまった。妻や子供等はみんな若過ぎると云って笑ったが、母だけはこの方がよく似ていると云った。母親の眼に見える自分の影像と、子供等の見た自分の印象とには、事によったら十

年以上も年齢の差があるかもしれない。それで思い出したが、近頃自分の高等小学校時代に教わったきりで逢わなかった先生方の写真を見た時にちょっとそれと気がつかなかった。写真の顔が［A］若すぎて子供のような気がしたからである。よくよく見ているとありありと三十年前の記憶が呼び返された。これから考えると吾々の頭の中にある他人の顔は自分と一緒に、しかもちゃんときまった年齢の間隔を保持しつつだんだん年をとるのではあるまいか。

同じ自分が同じ自分の顔を描くつもりでやっていると、その時々でこのように色々な顔が出来る、これはつまり写生が拙（へた）なためには相違ないが、［B］面白い事だと思った。No.1にもNo.2にもどこか自分に似たところがあるはずであるが、1と2を並べて比較してみると、どうしても別人のように見える。そうしてみると1と2がそれぞれ自分に似ているのは、顔の相似を決定すべき主要な本質的の点で似ているのでなくて第二義以下の枝葉の点で似ているに過ぎないだろうと思われる。

これについて思い出す不思議な事実がある。［　X　］たしかに面白い問題になるに相違ないと思った。それからまた一方では親子の関係というものの深刻な意味を今更のように考えたりした。

一体二つの顔の似ると似ないを決定すべき要素のようなものは何であろ

う。この要素を分析し抽出する科学的の方法はないものだろうか。自分は自画像を描きながらいろんな事を考えてみた。同じ大きさに同じ向きの像を何十枚も描いてみる。そしてそれを一枚一枚写真にとって、そのおのおのを重ね合せて重ね撮り写真をこしらえる。もしおのおのの絵が実物とちがう「違い方」が物理学などでいう誤差の法則に従って色々に分配せられるとすれば、重ね撮りの結果は丁度「平均」をとる事になってそれが実物の写真と同じになりはしまいか。もしそれが実物と違えばその相違は書き手に固有ないわゆる[注②]personal equationを示すか、あるいはその人の自分の顔に対する理想を暴露するかもしれない。それはとにかく何十枚の肖像を大体似ている度に応じて二つか三つくらいの組に分類する。そうしてその一つ一つの写真を本物の写真と重ねてみてよく一致する点としない点とをいくつかの箇条に分かって統計表をこしらえる。こんな方法でやれば[3]「顔の相似」という不思議な現象を系統的に研究する一つの段階にはなりそうである。

　自画像はNo.2でしばらくやめてまた静物などをやっているうちに、一日、画家のT君が旅行から帰ったと云ってわざわざ自分の画を見に来てくれた。有(あ)り丈(た)けの絵をみんな出して見てもらって色々の注意を受け、色々の面白い事を教わって大変に[丁]ケイハツされるような気がした。自画像の二

枚については、[A]色が白過ぎるというのと、もっと細かに見て、色や調子を研究して根気よく描かなければいけないというのであった。なるほどそう云われてみると自分の描いた顔は普通の油絵らしくなくて淡彩の日本画のように白っぽいものである。[D]鏡が悪いために実際いくぶん顔色が白けて見えたには相違ないが、そう云われて後に鏡と画と較べてみると画像の方はたしかに色が薄くて透明に見えて、注③上簇期（じょうぞくき）の蚕のような肌をしていた。そして如何にもぞんざいで薄っぺらなものに思われて来た。それからT君は色々の話のうちにトーンというものの大切な事を話した。眼を細くしてよく見極めをつけてから一筆ごとに新しく絵具を交ぜては置いていくのだそうである。ある人は六尺もある筆の先へちょっと絵具をくっつけて、鳥でも刺すようにして一点くっつけてはまた眺めて考え込むというのである。この話を聞いているうちに何だか非常に愉快になって来た。そういう仕事をしている画家と、非常にデリケートな物理の実験をやって敏感な螺子（ねじ）をいじっては眼鏡を覗いている学者と全く兄弟分のような気がして面白くなって来た、そしてどういう訳か急に可笑（おか）しくなって笑い出すとT君も一緒に笑い出してしまった。

　それから二、三日経ってT君の宅へ行って同君の昔描いた自画像を二枚見せてもらった。それは小さな板へ描いた習作であったがなるほど濃厚な

絵具をベタベタときたならしいように盛り付けたものであった。しかし自分ののっぺりした絵と比べてみるとこの方が比較にならぬほどいきいきしていて真黒な絵具の底に熱い血が通っていそうな気がした。

D 考えてみるとこのくらいの事は今はじめて知った訳ではない。この自分の自画像がもし他人の絵であったとしたらおそらくはじめからまるで問題にならないで打っちゃってしまうほどつまらないものかもしれない。ただそれが自分の描いたのであるがためにこんな分かりきった事が分からないでいたのをT君の像を眺めているうちにやっとの事で明白に実認したに過ぎない。一体自分は、多くの人々と同様に、自分の理解し得ないものを「つまらない」と名づけたり、自分と型のちがった人を「常識がない」と思ったりするような事がかなりありそうであるが、幸いにあるいは不幸にして、自分の絵を一つの単純な絵として見て玄人（くろうと）のと比較する時に、自分の方がいいと思い得るほどの自信がないと見えて、T君の画と説とにすっかり感心してしまった。そうして頭を新しく入れ換えて第三号の自画像に取りかかる事にした。

注　①　左衽…ここでは「左前」と同じ着物の着方を指す。このような着方は、普通とは反対で、死者の装束に用いられた

ために、不吉なものとされた。

② personal equation…観察や判断において、個々人において生ずる誤差のこと。個人誤差。

③ 上蔟期…養蚕業で、十分成長した蚕に繭を作らせるため、「蔟(まぶし)」と呼ばれる道具に移す時期のこと。

問一　二重傍線部甲・丁に該当する漢字を、解答欄に楷書で記せ。

問二　二重傍線部乙・丙と同じ意味の語として適切なものを、次のア〜オの中からそれぞれ一つずつ選び、解答欄に記入せよ。

乙　雑作なく

ア　適切に　イ　容易に　ウ　そっくりに　エ　上手に　オ　丁寧に

丙　おっくう

ア　至難　イ　退屈　ウ　面倒　エ　不愉快　オ　不利益

問三　空欄 A 〜 D に入る語の組み合わせとして適切なものを、次のア〜オの中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

ア　A　あまり　B　ともかくも　C　やはり　D　もっとも
イ　A　それほど　B　どうにか　C　やはり　D　よくよく
ウ　A　それほど　B　なんとか　C　そもそも　D　やはり
エ　A　あまり　B　ともかくも　C　それでも　D　まったく
オ　A　もっとも　B　なんとか　C　そもそも　D　まったく

問四　傍線部１「要するに一面の鏡だけでは永久に自分の顔は見られない」とあるが、これはどういうことか。最も適切なものを、次のア〜オの中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

ア　二枚以上の鏡を使わないかぎり、ふだんは気づくことのない自分の新たな側面を発見することは不可能であるということ。

イ　自分の顔は、ふだん見ることができないために、鏡に映った姿を一瞬見た程度では、それと気づくことができないということ。

ウ　鏡のような道具を使った認識は物理学的には可能であっても、それらによって対象（顔）の本質をとらえることはできないということ。

エ　鏡に映った像は、自分の一面を映すに過ぎず、他の視点からの像と見比べなければ、自分の本当の姿に迫ることはできないということ。

オ　鏡に映った顔は左右が反転した別物だといってよく、自分の能力だけで微細な点までそれを補正し、正確な姿を認識することは不可能だということ。

問五　傍線部２「それでもやっぱり不愉快であった」とあるが、筆者がそのように感じた理由として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

ア　鏡を使って描くのは、自分の画力からしてやむを得ない手段ではあったが、それでは対象である自らの顔と向き合っていることにならないと感じられたから。

イ　社会通念や常識に従って描いてはみたものの、科学と芸術に対する自分の見方に照らして、観察した姿とはちがうように描いてしまったという気持ちが残ったから。

ウ　科学者としての自分に一定以上の自負を持ってきたにもかかわらず、自らが持つ科学的常識と社会通念や道徳とのあいだの矛盾を解消できないことに気づかされてしまったから。

エ　自分の感じる不自然さにしたがって、鏡に映ったとおりでなく、左衽になるように自画像を描いてみたものの、自分には似ていると思えず、自らの画力不足を痛感することになったから。

オ　鏡に映った通りを描いた左衽の自画像は、見たままに描くという自分の科学者としての姿勢からは必然的ではあるが、表情の非対称性ゆえに、やはり本来の自分との違いを意識させられたから。

問六　空欄 X には、次のア〜オの五文が入る。正しい順序に並べかえ、その順に記号を解答欄に記せ。

ア　ある時電車で子供を一人連れた夫婦の向い側に座を占めて無心にその二人の顔をながめていたが、固(もと)より夫婦の顔は全くちがった顔で、普通の意味で少しも似た処はなかった。

イ　このような現象を心理学者はどう説明するだろうか。

ウ　父親のどこと母親のどことを伝えているかという事は容易に分かりそうもなかったが、とにかく両親のまるでちがった顔が、この子供の顔の中で渾然(こんぜん)と融合してそれが一つの完全な独立な極めて自然的な顔を構成しているのを見て非常に驚かされた。

エ　そのうちに子供の顔を注意して見ると、その子は非常によく両親のいずれにも似ていた。

オ　それよりも不思議な事は、子供の顔を注視して後に再び両親の顔を見較べると、はじめ全く違って見えた男女の顔が交互に似ているように思われて来た事である。

問七　傍線部３「顔の相似」をめぐる説明として、最も適切なものを、次のア〜オの中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

ア「顔の相似」ということは当たり前のことのように考えられるが、考えてみればよく分からない不思議な現象で、親子の関係に深刻な問題を投げかけるばかりでなく、何枚もの自画像を描くことによって、自己のアイデンティティの分裂といった危機をもたらすことになる。

イ　子供の顔を介して血のつながりのない両親の顔も似てくるという「顔の相似」に関する不思議な現象は、遺伝学など自然科学の研究ばかりでは説明がつかず、心理学などの方法も取りこみながら、系統的に行うことによってはじめて解明することができるようになり、自画像にかかわる問題も解決されることになる。

ウ　今日までのところ現代科学の方法では「顔の相似」ということを簡明に説明することができないが、これまで進歩を遂げてきた物理学と同様、この現象を統計的に研究することでその法則を把握することができるならば、自画像の描法を確立できるばかりでなく、人間の心理の解明にも大きく寄与することが可能となる。

エ「顔の相似」ということは不思議な現象で、二つの顔が似ると似ないということを決定する要素が何かは分からないが、数多くの自画像を描き、その写真を重ね合わせることによってその「平均」をとったところに、自画像を描く人間の自分の顔に対する理想が暴露されることになる。

オ　自画像を描くことによって意識させられるようになった「顔の相似」という現象は、これほど発達した現在の科学でも充分に解明されていないが、それを考察するためには自然科学一般と等しく、比較と分類によって共通点と相違点を徹底的に洗い出して、統計的に処理することが必要である。

問八　自画像を描く経験を通して筆者が認識した内容として誤っているものを、次のア〜オの中から二つ選び、解答欄に記入せよ。

ア　両親の顔と子供の顔とは、表面的な枝葉の違いを超えて、つねに本質的な点で似通っており、そのことは、親子の絆の切り離しがたさを示しているということ。

イ　芸術家たちはつねに対象の全体を意識しており、科学者である自分の画が不十分なのは、細部の形やトーンばかりを追って、全体像を見ることがないからだということ。

ウ　トーンを軽視した絵画は薄っぺらであり、対象を観察しつつ、一筆ごとに絵具を重ねていった絵は、きたならしく塗りつけたように見えても、いきいきとしたものになるということ。

エ　芸術領域に属する画家の営みと、科学者である物理学者の営みとは、一見まったく無縁に見えるが、対象の観察と試行錯誤の繰り返しにもとづいているという点ではひどく似通っているということ。

オ　われわれが他人の顔に対して持っている印象は、その人の実年齢を反映しているばかりでなく、自分の記憶の中の印象をも反映しているということ。

問九　寺田寅彦は熊本の第五高等学校時代の英語教師から俳句の手ほどきを受けたが、その英語教師はやがて小説家となり、『吾輩は猫である』で「首縊りの力学」を説く水島寒月、『三四郎』では大学の実験室で「光線の圧力の試験」をする野々宮宗八のモデルとして教え子の寺田寅彦を使った。この小説家とは誰か、そのフルネームを漢字（楷書）で、解答欄に記せ。

（次ページより解答欄）

問一

甲

丁

問二

乙

丙

問三

問四

問五

問六

↓

↓

↓

↓

問七

問八

問九

第四講 「差異」と「類似」の発展的読解　解答

問一　甲　名状　丁　啓発

問二　乙　イ　丙　ウ

問三　ア

問四　オ

問五　イ

問六　ア→エ→ウ→オ→イ

問七　オ

問八　ア　イ

問九　夏目漱石